

アメリカの場面緘黙グループ小児期不安ネットワーク (SMG~CAN) の資料です。  
 日本では「場面緘黙」の理解や治療体制が大変遅れています。  
 この資料を日本で使われる時は、日本の現状を考えた上で参考にされることをお勧めいたします。

原文: " Why does a child develop Selective Mutism? "

The Selective Mutism Group Childhood Anxiety Network (SMG~CAN) のHP  
<http://www.selectivemutism.org/> の F&Q 3 番目

資料: 配布してください!

場面緘黙を説明するために、この情報を先生や家族、友達、専門家にお伝え下さい。

E. シボンブラム博士 著  
 場面緘黙不安研究治療センター (SMart センター) 代表・所長  
 場面緘黙グループ小児期不安ネットワーク (SMG~CAN) 最高責任者・医学管理責任者  
 フィラデルフィア オステオパシー医療大学 家庭医学・心理学 臨床助教授

## なぜ場面緘黙になるのでしょうか？

場面緘黙の症状がある子どもたちのうちの大多数には、不安になりやすい遺伝的な傾向があります。つまり、こうした子どもたちは、家族の誰かから不安になりやすい傾向を遺伝的に受け継いでいるので、おそらく不安障害に陥りやすいだろうということです。このような子どもたちが不安のあらわれとしてみせる行動には、次のようなものがあります。

- ・ 親から離れることが難しい
- ・ 不機嫌になりやすい
- ・ 親にくっつきたがる
- ・ 融通がきかない
- ・ 睡眠に問題がある
- ・ すぐにかんしゃくを起こしたり泣いたりする
- ・ 乳児期から極端に恥ずかしがり屋である

そして、家庭を離れ (幼稚園や学校などで) 社会と交流し始める年齢になると、会話やコミュニケーションに対する絶え間ない不安が続くことにより、次のような症状を示しはじめます。

- ・ 凍り付いたように動かなくなる
- ・ 働きかけても反応がなくなる
- ・ 姿勢がこわばる
- ・ 無表情になる
- ・ 笑顔を見せなくなる
- ・ 緘黙症状を示す

研究により、生まれつき抑制的な気質（訳者注1）を持っている子どもがいることが明らかになっています。つまり、この子どもたちは、他の子に比べて、まだほんの乳児期であっても、慣れない状況で不安感を持ちやすく慎重になりがちなのです。このことから、場面緘黙の子どものうち、多くの子ども、もしかするとほとんどの子どもが、この生まれつき抑制的な個性の持ち主ではないかと考えられます。

また、研究により、このように行動を抑制しがちな子どもたちは、アミグダラと呼ばれるアーモンド形の脳の部位において、興奮性の閾値（訳者注2）が低いということが明らかになっています。アミグダラの正常な働きは、潜在的な危険のシグナルを受け取って、処理し、個体防衛の助けとなるような一連の反応を引き起こさせることにあります。不安になりやすい人たちの場合には、実際にはそれほど危険ではない時にまで、アミグダラが過剰に働き、このような反応を引き起こしてしまうと考えられます。

場面緘黙の子どもの場合には、学校や遊び場、社交的な集まりでの社会的交流が、その不安反応の引き金となります。その恐怖感には、論理的な根拠を見つけることは出来ないでしょう。しかし、子どもが体験するこの感覚は、恐怖症の人が体験する恐怖感と同じように、まさに現実のものなのです。

例えば、蜘蛛恐怖症の人が、タランチュラに遭遇してしまったとしたら、あるいはもっとひどいことに、それを無理やり見せつけられたり触るよう強いられたりしたとしたら、現実存在するものとして、身のすくむような恐怖感を感じることでしょう。その人は、論理的には蜘蛛は無害なものだと理解することができます。しかし、どんなに説明されたところで、その人が感じる恐怖や、心臓がドキドキしたり、手の平に汗をかいてしまったり、とにかくその場から逃げ出したいとなった体の反応は、なくなりはいけません。

このような経験を経た後に、場面緘黙の子どもの場合は、自分が話すことを期待された時に起こる、このぞっとするような感覚をうまく処理することができないために、緘黙となるのです。子どもは受け答えをしない時なら、いつもこの圧迫感から逃れて、恐怖を感じずに安心していられるのです。

よくある内気で臆病な子と比べるならば、場面緘黙の子どもは、臆病や内気といわれるものの中でも最もはなはだしい例であるといえます。おそらく、内気であることと場面緘黙との違いは、程度の問題でしょう。しかし重大な違いは、場面緘黙の場合には、そのことによって子どもが自分の能力を発揮する機会を持つことが妨げられてしまうということです。もしも治療されなければ、このことが子どもの教育、自己評価、そして社会性の発達といった点において、深刻な打撃を与える可能性があります。

また現在、先に上げた遺伝的、生理学的な素因（訳者注3）以外にも、場面緘黙の発症に影響する要因があると考えられています。場面緘黙の子どもの中には、表出性言語障害がある子どもがかなりおり、二ヶ国語を話さなければならない環境（家庭と学校とで話す言語が異なる等）にいる子どもも相当数います。このような要因は、子どもの場面緘黙になりやすい傾向にさらに拍車をかけると考えられます。

しかしこの場合にも、不安というものが根本的な原因であることには変わりありません。このような、言語に問題を持つ子どもは、自分の話し方がよけいに気になり、そのため、他の人からどう思われるだろうという恐怖感が増してしまうのではないかと考えられます。

こうした危険要因は、おそらくは付加的なものです。つまり、子どもが不安に対する遺伝的リスクを持っている場合、二ヶ国語を話さなければならない環境や話し言葉の障害がそこに加わると、そうした要素が加わった分だけ、場面緘黙になる可能性がより高まるのです。

**ストレスの多い環境もまた、危険要因のひとつかもしれませんが、けれども場面緘黙の原因が、虐待や、ネグレクト、トラウマ（心的外傷）と関係しているという学術的証拠は出されていません。**

この点を強調しておくことは、非常に重要です。というのも、昔からずっとこのような憶測がされてきましたし、また残念ながら今日においてもなお、多くの人々がそう考えているからです（訳者注4）。こうした誤解によって、支援を必要としている家族の人々は頻繁に傷ついています。

子どもへの虐待が場面緘黙の原因であるという学術的証拠は全く公表されていません。しかし実に嘆かわしいことに、緘黙児の親や家族の多くは不当にも、虐待したからだ、と誤った非難を受けたり、自分たちは周りから虐待を疑われているのではないかと感じざるをえないような状況なのです。

実際、研究により明らかになったのは、緘黙の子どもは平均的な子ども以上には、何の虐待もトラウマも経験してきていないということです。

（訳者注1）抑制的な気質：Jerome Kagan によって定義づけされた子どもの気質のタイプ。

その性質としてあげられているのは

- ・他人に対して慎重な態度をとる
- ・目立つことを嫌う
- ・新しい状況になじむのに時間がかかる

（訳者注2）閾値【イキチ、シキイチ】(threshold value) ある系の応答を引き起こすに必要な刺激や入力 of 最小限の値。

（訳者注3）言葉の使い分け； 文章の趣旨が明確になるよう次のように言葉を使い分けることとする

- ・「素因」・ 遺伝的、生理学的な、また一般的な条件について述べる時に用いる
- ・「原因」・ 場面緘黙にとっての根本的な条件について述べる時に用いる
- ・「要因」・ 場面緘黙にとっての付加的条件について述べる時に用いる

（訳者注4）日本では、場面緘黙は本人の甘えやわがままであると捉えられてきました。そして、両親や祖父母による甘やかしや溺愛、過干渉、または愛情不足などの家庭的要因がその原因であるという説が流布し、それにあてはまらない家族までもが誤解を受けるという結果を招いてきました。

---

著作権：SMG~CAN and Dr. E Shipon-Blum 翻訳：Knet 翻訳チーム（2006年12月公開）

かんもくネット（Knet）<http://kanmoku.org/>